

正課内教育および正課外活動における

読書推進活動の展開

—流通科学大学初年次科目「文章表現Ⅱ」の取り組み—

Reading Promotion Activities in a Regular Subject and an Extracurricular Activity

橋本信子*、桑原桃音†

Nobuko Hashimoto Momone Kuwabara

初年次教育科目「文章表現Ⅱ」では、2015年度から正課内教育およびそこから派生する正課外活動で読書推進に取り組んでいる。2017年度は教員主導の読書推進教育をさらに拡大した。学生からもビブリアバトルの開催や、読書会などの自主活動が生まれた。こうした取り組みを支えたのは大学の既存の教育支援制度である。2017年度の読書推進活動の実践と学生の成長について報告する。

キーワード : 読書推進、文章表現、正課内教育、正課外活動、協働

I. はじめに

本稿は、流通科学大学（以下、本学）の初年次教育科目「基礎技能 A（文章表現Ⅱ）」（以下「文章表現Ⅱ」）（前期開講、2単位）およびそこから派生した正課外における読書推進教育の取り組みと、学生主体による正課外活動の発足について報告する。

筆者らは、2015年度より「文章表現Ⅱ」を担当している。本学では、1年生前期に「文章表現Ⅰ」もしくは「文章表現Ⅱ」を履修することを推奨している。レポート作成の手順を習得することをねらいとする「文章表現Ⅰ」との違いを明確にするため、「文章表現Ⅱ」では、短文で主張を展開する文章力を養成し、多様な場面で使える文章力と表現力を実践的に身につけることを目標に据えている。最大の特徴は、図書館の資料を活用して、意見文、書評、POPなどの多様な形態の作品を作ること、それら成果物を学内外に積極的に発信することである。また地域書店主によるゲスト講義を組み込み、教員以外の大人との交流の機会もつくっている。さらに授業終了後に

*流通科学大学商学部, 〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

†流通科学大学商学部, 〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

(2018年1月30日受理)

©2018 Center for Promotion of Higher Education

受講生から有志を募り、学内外での成果発表の場をつくってきた。これらの取り組みについては、橋本（2017）で報告した¹⁾。

2017年度は、授業内容は過去2年とほぼ同様であったが、正課外ではいくつもの新たな取り組みを展開することができた。教員主導によるものでは、地域書店との連携をさらに拡大し、兵庫県内10社の書店との協働によるブックフェアを開催した。有志学生による学外での学習成果発表の機会も増やすことができた。加えて、学生の側から読書推進に関わる活動をしたいという動きが立ち上がってきたことを特筆したい。橋本（2017）では、2016年度の活動終了時点では、教員主導の正課外活動で学生が目覚め、「図書館の協働相手としてアクターに加わる可能性が見えてきている」と記した。2017年度は、このときの有志学生が中心となって新しい読書推進活動（「ビブリオバトル」）の企画を提案し、図書館と協働して開催した。この取り組みは学内の企画コンテストで最優秀賞を獲得した。その結果、大学からの期待を受けて、彼らを中心に読書推進の任意団体が組織化されようとしている。

さらには、桑原が読書会を立ち上げ、そこに「文章表現Ⅱ」有志学生の一部も加わって新たな知的交流の場を育てている。この読書会も上記の読書推進団体とゆるやかにまじりあう動きを見せている。

以下、Ⅱ章では教員主導による読書推進教育について、Ⅲ章では学生主体による読書推進活動の発足について報告する。Ⅳ章では一連の動きを振り返り、正課教育と正課外活動を支える要素として大学の諸制度の活用の効果について考察する。

Ⅱ. 正課授業から正課外活動につなぐ教育実践

1. 対象科目「文章表現Ⅱ」2017年度の実践内容

2017年度は、入学直後に実施したアンケートにおいて、高校での卒業論文やレポート作成の経験、国語系の選択科目の履修経験がある学生、作品づくりやプレゼンテーションへの指向が高い学生220名が「文章表現Ⅱ」に配置された。履修を推奨してはいるが必修ではないため、実際の登録者数は146名にとどまった。テキストは、「文章表現Ⅰ」および「Ⅱ」を担当する教員複数名で刊行した教科書を用いた²⁾。これにより、学生と両科目の担当者は、もう一方の科目の授業内容を、テキストを通じて知ることができるようになった。

さて、「文章表現Ⅱ」では前述のねらいに沿って、1) 図書館の資料の活用、2) アクティブラーニング、グループワーク、3) 学習成果物の外部への公開を盛り込んだ授業を組み立てている。具体的な授業内容については、橋本（2017）で詳述したプログラムを2017年度もほぼ踏襲しているので参照されたい。

このうち、3) の外部への発信については、2017年度も、①新聞への意見文投稿、②図書館主催の書評コンテストへの全員応募、③POP等作品の学内外での展示といった機会を作った。

① 2017年度は3名の学生の投書が、愛媛新聞、神戸新聞、毎日新聞に掲載された。新聞に掲載された学生の達成感は大い。ただ、100名を超える学生がほぼ同時期に投稿するため、掲載率は低くなる。また、新聞を読み、意見を文章化する訓練は一回限りではなく、反復して取り組みたい。本学では全学的にも新聞を読む取り組みに力を入れようとしており、2017年度はキャリア開発課が3年生対象に、新聞を読んでエッセーを書くコンテストを開催した。「文章表現Ⅱ」の過去の受講生からも入賞者が出た。今後は、授業終了後もこのような正課外での学習機会をとらえるよう学生に働きかけをしていきたい。

② 2017年度も「文章表現Ⅱ」では、受講生全員が図書館主催の学生書評コンテストに応募した。最優秀賞は逃したものの、優秀賞2名(3名中)、佳作5名(7名中)の受賞者を輩出することができた。なお、このコンテストは応募者の名前や所属を伏せて審査が行われる。筆者らも提出後は一切関与していない。

③ ②の書評で取り上げた「おすすめの一冊」のPOP等販促グッズの制作については、2017年度はさらなる活用の場をつくることができた。「神戸新聞ブッククラブ(KBC)」に加盟する兵庫県内各地の10書店において、学生のPOP作品を使ったブックフェアを開催することができたのである。この企画は、2015年以来、読書推進で連携している井戸書店(神戸市須磨区)・森忠延氏の仲介で実現した。学生が作った100点ほどのPOPを教員がまとめてデータでKBCに提供し、KBC加盟10社が投票で10点を選定した。10作品は2017年10月から11月にかけて、10書店の店頭で実際にPOPとして活用された。

作品が教員以外の他者の目に触れることを意識すると作品の質が大きく向上する。テキストにも過去の受講生の作品やワークシートを見本として掲載した。開講時のオリエンテーションでは、過去の授業の様子を撮った写真を見せたり、POP作品を提示したりして、楽しそうという印象を抱かせることに成功した。自分も新聞に掲載されたり、コンテストで選ばれたり、書店でPOPとして活用されたり、教科書に載るかもしれないという期待や意欲を持ちながら授業に臨んでいたことは、学生の毎回の授業時の感想コメントにも読みとれた。

2. 正課外教育の拡大

a. 神戸新聞ブッククラブとのコラボフェア

正課外活動については授業開始時から何度かアナウンスし、最終回に受講生全員に参加の意向を調査したところ、前年の倍以上の22名が参加希望を表明した。学外での成果発表(次項の「図書館総合展」)に学生を派遣するための予算が限られているため、後期開始前にあらためて活動日や活動内容の詳細を連絡し、事前事後の活動に通して参加できる場合のみ学外発表に参加してもらうことにした。最終的には、1年生4名と、過去の受講生で2017年度の授業補助者(SA)を務めた上級生3名(3年生1名、2年生2名)の7名が集まった。

有志活動の第一弾は、上記の KBC とのコラボフェアの取材である。まずは橋本が一店を取材し、それを見本に、学生に取材の申し込みや撮影の仕方などを伝授した。フェアは兵庫県内各地の書店で開催していたため、学生が休日や放課後に手分けして訪れた。取材に行った学生の声を紹介する。

学生 A 「各書店によってスペースの規模はバラバラだったが、比較的目立つ場所にスペースを設けていただけ」「どの書店の方もとても親切な対応で、今回のコラボフェアに前向きに取り組んでくださっていた」。学生 B 「実際に書店に行くと普通に販売している本と同じように学生が作ったポップが置いてあって、書店さんがすごく協力してくださって成り立っているのだとそこで改めて感じた」。

学生 C は、「書店員の方から『このフェアのために何冊か本を新しく入荷したが、早速数冊売れていた。ありがとう』とお褒めの言葉を頂いた」と有志メンバーで作っている連絡網 (Messenger のグループ) に流した。その報告を読んだ学生 B は、「後でブッククラブとのコラボフェアの影響で、売れた本もあると聞いた時にはポップの本当の役割が果たせてよかったと思った」と活動レポートに記している。彼らは、自分たちの学習成果が経済活動に貢献していることを実感したのである。



(写真1) KBC 加盟店での「KBC×流通科学大学「文章表現Ⅱ」コラボフェア」の様子。

森井書房 (姫路市) 2017 年 11 月 「文章表現Ⅱ」チーム有志学生の撮影

さらには、筆者らの想定を超える反応もあった。ブックフェア選定作品のひとつを刊行している出版社が自社の Twitter や Facebook ページでフェアと学生の作品を好意的に取り上げたので

ある³⁾。橋本が出版社に連絡をとったところ、その書籍の編集担当者や作家も喜んでくれるとの返答を得た。その時点まで筆者らは、書店業界との連携による学生の作品の流通現場での活用という派生効果は考えていたが、出版社や作家に関しては、著作権侵害に当たらないよう指導せねばならないという、やや消極的な観点からの関わりでとらえるにとどまっていた。しかし、書籍を教育の題材としている以上、出版社や作家も「ステークホルダー」である。喜んでいただける作品を生み出すよう指導するという責任を感じるとともに、この実践の手ごたえと今後の広がりの可能性を確認した。

なお、このブックフェアに選ばれた作品 10 点と、のちの本学学園祭 (11 月 11-12 日) での「文章表現Ⅱ」主催 POP コンテストで得票数の高かった作品 5 点には、後日、賞状と副賞 (図書カード) を進呈した (ブックフェア選定作品には KBC から副賞をいただいた)。

賞状と副賞は、彼らの所属する初年次ゼミの担当教員に渡してもらった。所属学生の活躍を知ったゼミ教員にはたいへん喜ばれ、学生の意外な面を知ったと驚かれた方もあった。成果物を科目担当教員以外の他者が評価する機会をつくることは、学生に刺激や自信を与えるだけでなく、周囲の教職員の当該学生への再評価にもつながる。さらに教員間、科目間の信頼関係、連携の強化にもつながることをあらためて確認したのである。

KBC×流通科学大学「文章表現Ⅱ」コラボフェア参加店舗 (KBC のサイト掲載順による)

三和書房 (尼崎市)	巖松堂書店 (明石市)
紀伊國屋書店神戸店 (神戸市中央区)	紀伊國屋書店加古川店 (加古川市)
ジュンク堂書店三宮店 (神戸市中央区)	西村書店 (加西市)
大垣書店神戸ハーバーランド umie 店 (神戸市中央区)	井上書林 (姫路市)
井戸書店 (神戸市須磨区)	森井書房 (姫路市)

b. 図書館総合展への参加

KBC とのコラボフェアの取材と並行して、有志学生はそれぞれの関心にしがたって、図書館主催の選書ツアーやブックカフェ、「ビブリオバトル」開催準備 (Ⅲ章 1)、読書会 (Ⅲ章 2) といった正課外活動に参加した。そうした活動と授業での実践を 11 月 7-9 日、パシフィコ横浜で開催された「第 19 回図書館総合展」で発表した。

図書館総合展は、図書館に関する日本最大規模のイベントである。2017 年は 30,701 人が来場した⁴⁾。「文章表現Ⅱ」チームが参加するのは 2016 年に続いて 2 回目である。

2017 年度は、学生の活躍する機会を倍増した。ポスター発表は、「読書推進活動における授業と図書館と書店の協働」「学生主体の読書推進活動」の 2 テーマで出展し (写真 2)、「第 2 回全国

学生協働サミットフォーラム『利用者と図書館の協働について考える』では、「学生協働のネットワークづくり～タテのネットワーク」をテーマに、また「全国学生協働サミット特別セッション」では、「授業×図書館×地域書店のコラボによる読書推進活動」をテーマにプレゼンテーションを行った（写真3,4）。



（写真2）「図書館総合展」でのポスター発表の様子 2017年11月7日橋本撮影

いずれの発表においても、受講生が授業終了後に有志で読書推進活動に取り組んでいること、それでいながら10店もの書店と共催でブックフェアを開催したことに驚きの声が多数寄せられた。学生たちは、他大学の学生や教職員、図書館関係者、書店や出版関係者などとの交流を通して、自分たちの活動への自信を高めた。同時に、他大学の活発な読書推進活動を見聞きして、自分たちの活動を継続、拡大するために組織化したいという気持ちを募らせた。

以下に、有志学生の活動レポートより抜粋して紹介する（原文ママ）。

【有志活動への参加動機】

- ・昨年参加してとても良い経験になったから、今年も参加してみたいと思った。また、自分自身の中で昨年の図書館総合展での活動よりももっとステップアップしたことをしたいと思ったから。
- ・図書館総合展を通して他大学の学生と交流してみたかったから。

【来場者から寄せられた感想】

- ・多くの人から、授業内での取り組みでここまで行っていることは素晴らしいといったことを言われた。
- ・授業内でこれだけの取り組みを行っているのが羨ましい（他大学の学生から）。



(写真3) 図書館総合展「第2回全国学生協働サミットフォーラム『利用者と図書館の協働について考える』」におけるプレゼンテーション「学生協働のネットワークづくり～タテのネットワーク」の様子
2017年11月7日橋本撮影



(写真4) 図書館総合展「全国学生協働サミット特別セッション」でのプレゼンテーション「授業×図書館×地域書店のコラボによる読書推進活動」の様子 2017年11月8日橋本撮影

- ・どうしても図書館内でしか活動の幅を広げられないので地域の書店と連携しているのがすごい。
- ・自分たちが授業から派生して出来たメンバーであることに驚いている人が多かった。
- ・U 大学さんにも、KBC の取り組みを聞いて「大学前に書店があるのでそこに頼んで似たようなことをやってみようと思う」と言っていた。実際に他大学でも取り組んでもらえる可能性があるということがわかり、嬉しかった。

【他大学との交流から得られたこと】

- ・ほとんどの大学が自分たちより活動の規模が遥かに大きくて驚いた。
- ・いろんな団体の取り組みを知ることで、自分たちが次に何ができるか考えさせられたし参考になった。
- ・サミット後は自分たちと同じような課題を持つ大学の学生団体と話して、意見交換ができたのが良かった。
- ・他大学の課題が自分たちが直面している課題と似ているので、協力してイベントなどを催してみたいと思った。

【今後についての構想、希望など】

- ・有志メンバーを増やすために、今まで総合展に関わってくれた学生やビブリオバトルに参加してくれた学生に声をかける。
- ・活動を継続するために、定期的に集まる日を決める。

学生たちは、学内外の他者からの直接、間接のまなざしや評価を受けることを通じて、自分たちの学びを再評価し、かつ相対化することができたのである。

以上、教員主導による正課教育と正課外活動における読書推進教育の実践を報告した。次章では、学生が主体となって起こした読書推進活動について報告する。

Ⅲ. 学生主体の読書推進活動の発足

1. ビブリオバトルの開催

2016 年から有志活動に参加している 2 人の学生が、「大学生の読書推進活動～ビブリオバトル～」と題する企画を立ち上げ、本学の既存の企画コンテストである「学生チャレンジプロジェクト」に応募した。ビブリオバトルとは、おすすめの本を 5 分間口頭で紹介する、知的書評合戦とも称されるイベントである。紹介者はバトラーと呼ばれる。すべての紹介が終わったあと、もっとも読みたいと思った本を参加者全員で選ぶ。

「学生チャレンジプロジェクト」は、就職・キャリア支援や学内環境改善、課外活動活性化などあらかじめ決められたテーマに対して学生たちが大学活性化施策を提案する企画コンテストである。6 月に募集開始、8 月に一次審査、11 月に最終審査というスケジュールである。一次審査

を通過すると大学の担当部署からの助言や支援が得られ、活動資金3万円が支給される。最終審査で優秀な成績をおさめると、大学から公式の後援を受けられることになる。

彼らの企画は一次審査通過後、図書館からの支援を受けられることになり、「文章表現Ⅱ」有志チームや桑原の読書会（次項）メンバーも協力して具体化に向けて動き出した。

10月には、有志活動の定例会合のなかで「模擬バトル」を実施した。有志チームの1年生2人が模擬バトルを引き受け、前期の授業で書いた書評をもとに本を紹介した。他の学生と図書館職員が観衆になって進行を確認した。

ところが、企画した学生Dがのちに活動レポートで記したように、「企画を立てたが、その後の図書館と連携し始めた時から、図書館職員の方に頼りすぎていた」ため、11月中旬に予定していた学内でのビブリオバトルの開催が危ぶまれるようになった。そこで、図書館総合展参加中に「全国大学ビブリオバトル2017～首都決戦～関東Bブロック地区決戦」を有志チーム皆で観覧し、進行の細かな工夫を確認した。総合展の直後に開催された学園祭期間中も、「文章表現Ⅱ」の展示コーナーでビブリオバトルのリハーサルを開いた。この前後、連絡ミスやとりかかりの遅さで、危うく「学生チャレンジプロジェクト」を辞退しなくてはいけないのではないかという事態にも陥ったが、周囲の有志学生や教職員のバックアップで、「第1回ビブリオバトル」の開催にこぎつけた。

「第1回ビブリオバトル」は11月15日、図書館ラーニングcommonsにおいて開催された。告知の遅さから学生の観覧者は8名にとどまったが、教授会での告知が功を奏したのか14名の教職員が観覧し、あたたかい励ましの雰囲気の中円滑に終了した。企画した学生2名が11月25日に行われた「学生チャレンジプロジェクト」最終審査に臨み、最優秀賞を獲得するに至った。

企画した学生の一人Dはこう記している。「自分自身、結構楽観主義なところがあつたため、今回の件でそのようなところを改めようと思った。最終プレゼンでは、学長さんや、その他職員の方々から否定的なことは言われず純粋にビブリオバトルの詳しい説明などを求められていて好感触だった。その結果の最優秀賞で、非常にうれしくもあり、第一回を開催したとはいえ付け焼刃のような形になってしまったため、自分たちが受け取ってしまってもいいのだろうかという思いもあった。第2回が開かれるのであればしっかりと反省点を洗い出して万全の状態で開催したい」。

彼らは「自分たちの未熟さを痛感」しつつ、想定以上の結果を出すことができた。何より周囲の学生の協力で一つの企画を実現したことは得難い経験であった。大学からは、読書推進活動の継続と拡大を期待され、特例として本来の申請時期から外れてサークル結成を認められることになった。このことは彼らの一層の連帯と意欲と責任感を高めることになった。

2. 読書会の発足

2017年秋から、読書に興味がある学生数名が月に1回の頻度で「読書会」を開いている（写真5）。2018年1月に4回目の開催を予定している。この読書会は学生の希望によって発足した任意の活動である。立ち上げた学生は読書会を発足させた理由として、「同じ本を読んだときにそれぞれがどのような意見を持つのかに興味があった」こと、「本を読む友人が欲しかった」ことを挙げている。学生が「学び合い」の場を求めて集まっている点で、また参加者以外へのプレゼンテーションを想定しないという点で、この正課外活動はビブリオバトルや図書館総合展と異なる。

参加学生はスノーボールサンプリングの手法を援用して募った。つまり、読書会を立ち上げた学生を中心としてその友人に、そのまた友人に読書会への参加を呼びかけるという方式である。ポスター告知では学生が連絡しづらい、また、どれだけ読書に興味がある学生がいるのか判断できなかったからである。ただし、この方法だけでは学部、性別の偏りが生じ、読書や読解のメンターとなる学生が参加しないことが予想された。そこで、「文章表現Ⅱ」有志学生やビブリオバトルのバトラーを務めた学生など、他の読書推進活動にかかわる学生に教員が個別に声をかけ、参加者を確保した。このように、正課外の各活動は並立して発生したが、他の活動とゆるやかに繋がっていることを付言しておく。



（写真5）読書会の様子。自分のおすすめ本を紹介する参加者。2017年11月22日桑原撮影

この正課外活動は教員の研究室を会場にする以外は大学の後ろ盾や予算措置がないため、課題図書は学生が各自で準備している。比較的安価な文庫や新書を取り上げるようにしているが、金銭的負担がないわけではない。それでも参加する意欲が高いことは、学生の自主性、読書への本気度を示しているといえよう。

会場は、茶話会形式で気軽に参加できるように桑原の個人研究室で開催している。課題図書は初心者でも抵抗のない読みやすいものから始めた⁵⁾。参加者全員があらかじめ課題図書を読んできたうえで、本の良かった点、読みながら気がついた点を参加者全員が順番に発表する。その後、

「自由に、気楽に」をモットーにディスカッションをしている。ビブリオバトルと読書会のどちらにも参加した学生は、「ビブリオの運営はひたすらしんどかったが、その分、終わった後の喜びも大きかった」「読書会は本の内容について語り合うので準備なども少なく気軽に参加できる」という。

参加者の感想は、立ち上げた学生の意図と相似する。彼らは、「人それぞれオススメの本も違うが、興味をもつところも違う」「そんな考え方もあるのかと、新しい考えに気付かされる」「自分の読みの浅さを知った」「知るはずもない本に出会えた」など、それぞれの違いを知ったことで視野が広がったという。また、「本を真剣に語り合う場や人と出会えた」、「今では居心地の良い場の1つとなってい」というコメントは、参加学生にとって読書会が大学内における知的サードプレイス、つまり知的交流がなされる第三の居場所となりつつあることを示している。

学習効果についてはどうか。学生は「課題図書理解が深まった」だけでなく、「本を読むことへの抵抗がなくなった」「前より本に触れる機会が多くなった」「本をもっと深く読むようになった。ストーリーを楽しむだけでなく、なぜこうなったのか、なぜ作者はこの表現で表したのかを考えるようになり何回も何回も読み返すようになった。書評やビブリオバトルに参加してみたい」など、読書に対する姿勢が変わったことを挙げている。さらに、本を「人に紹介する難しさや楽しさを知り」、「様々な本を読み、上手く伝えられる力を付けたい」と思うようになったという意見が出た。

とりわけ興味深いのは読書会を立ち上げた学生が目覚ましい成長である。この学生は「文章表現Ⅱ」受講生ではなく、2016年度の桑原の初年次演習の受講生である。桑原からみて前年度の当学生は、誰とでも打ち解けようとする姿勢はあるものの、人前で緊張してなかなかうまく発言できず、その機会を避ける傾向があった。文章もうまく書けなかった。しかしながら、教員との読書談義をきっかけに、当学生はこれまでしてこなかった読書を習慣化することで、知的好奇心をもっと得たい、知的サードプレイスのような場をつくって仲間を増やしたいと考えるようになった。そして、読書会やビブリオバトルの運営に積極的にかかわるようになっていった。そうするなかで、人前で積極的に発表もし、文章能力も格段に向上させたのである。

なお、この活動における教員（桑原）の役割は、指導者というよりも、読書会のノウハウを伝授するファシリテーターである。ただし学生たちの読みを深めるため、専門の社会学の視点からの解説を添えるようにしている。その点については、「学生だけの読書会ではこのような効果は得られなかった」「いい加減な気持ちで読書会に参加することが避けられる」と積極的に肯定する声が学生からあがっている。

以上、2017年度の正課授業「文章表現Ⅱ」から派生した正課外活動の展開について報告した。最後に、あらためて本稿の主眼である正課外活動の展開を支えた要素についてまとめておきたい。

IV. 正課外活動に関する考察

1. 正課外活動を支える制度

本稿で報告した正課内、正課外の活動を行うにあたっては、本学の既存の制度をおおいに活用した。まず、教員が活用したのは、「スチューデントアシスタント (SA)」と「教育実践推進費」である。

本学の SA は 100 人以上の多人数講義を想定した制度であるが、特別の理由があれば、それ以下の規模の科目でも審議のうえ配置が認められる。「文章表現Ⅱ」では、アクティブラーニングや作品制作の補助者、受講生の身近なロールモデル、正課外活動の経験者としての SA の必要性を申請し、2 年に渡って配置を認められている。

本学では文科系の正課外活動の団体が少なく、読書関連のサークルもほぼない。SA に正課内、正課外でリードしてもらうことで、読書に関わる活動における縦のつながりを創出することができている。また SA 自身にとっても学びを継続できる機会になっている。

受講生の中からは、毎年、「SA になって授業に関わりたい」という希望者が現れている。2018 年度の SA をしたいと申し出ている有志学生 E はこう記している。「受講生として受講するのと SA として受講する違いを体験したいのと、先輩たちのようになりたい」。ロールモデルを提供するもくろみは成功していると言えよう。

もう一つの後ろ盾となった制度は、「教育実践推進費」である。これは、「教育プログラムの開発・実践の推進及び教育環境整備のため」、「特に教育改革、中でも「考える学習型」授業の企画・実践などに即した取り組みを促進するための」学内助成費である。申請額がそのまま認められるわけではないが、学生を何人も遠方に連れて行く正課外活動を実現できているのは、この制度のおかげである。

費用の面だけではない。正課外活動は、教員にとっても学生にとっても「せねばならない」ものではないが、こうした制度に乗ることで、教員には成果を可視化する責任が生じる。そこに時間を都合してでも参加しようという学生が集まるので、活動の密度が濃く、参加者の成長の度合いと充実感はより高まる。

愛媛大学では、狭義の正課教育ではないが教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動を「準正課教育」と定義している。そのような言葉を「付与」したことによって大学全体の中での位置づけが明確になり、予算措置の根拠が生じ、教職員が活動内容に責任を持って関与し適切な指導を行う一方、学生がより主体的に関わっているという。「“やらされ感”のない活動として教育改革へのモチベーションが高まる効果が期待できる」と分析している(村田・小林:2015:47)。この「名前の付与」の効果は、我々の正課外教育における助成費の付与にもあてはまると考える。

学生が活用した「学生チャレンジプロジェクト」の制度も同様の効果をもたらした。このコンテストに参加することによってタイムスケジュールが規定され、第一次審査通過後は管轄部署と

して図書館が関わることになった。学生 D の言葉によれば、「やってみたいこと」が「やりとげねばならない」ことに変化し、「後に引けない」状況がつくられたのである。結果、「第 1 回ビブリオバトル」は成功裏に終わり、最優秀賞を得た。大学からの正式な活動支援を得る権利を獲得し、さらなる読書推進活動の継続と拡大を期待されるという次のステップに進んだのである。

2. 正課外活動の組織化

前項の愛媛大学における「名前の付与」の効果は「準正課教育」に関する分析であるが、本学の学生たちが着手した活動の「サークル化」にもあてはまると考える。サークルを立ち上げるということは、まさに「名前の付与」である。それによって、自分たちが主体であるという自覚、学生間の一体感、連帯感、そして責任感が生じる。教員主導による活動よりも自分たちが主役であるという意識を高める効果が期待できる。

学生たちは、読書関連の活動を継続、拡大したいという希望を昨年からもっていた。しかし、教員主導の正課外活動は、学生 D によれば、「きちんと取り組める」という利点があった。さらに学生 C によれば、活動中に多くの人から「有志による活動ということに対して高評価を得られているとも感じていた」ため、学生主体のサークル化の「必要性」をそこまで強くは感じていなかったと振り返っている。その彼らが一步踏み出して、主体的に新しい企画に挑戦し、叱咤激励されながら試練を経た結果のサークル化への展開は、教員が提供する学習機会とはまた別種の経験値を高めただろう。「学生チャレンジプロジェクト」最終審査以降の彼らの動きや表情は明らかに変化した。学内企画コンテストでの高評価と後押しを受けて、彼らは図書館と連携した包括的な読書推進団体の設立を進めている。企画した学生以外の有志学生もすでにサークルへの参加を表明し、具体的な打ち合わせを重ねている。

教員主導で進めてきた読書推進活動は、2017 年度に複数の学生主体による読書推進活動の発生を促した。そして、それらはゆるやかに交わり発展する動きを見せている。筆者らも学生も図書館も、正課授業から派生した正課外活動を学生主体の活動へと発展させることを念頭におき、さまざまな経験を重ねてきた。いよいよ機は熟したと言えよう。これまでの経験を生かした質の高い活動が期待できるのではないか。今後の展開を見守りたい。

引用および参考文献

- 1) 橋本信子：「読書推進教育における図書館および書店との協働—流通科学大学初年次科目「文章表現Ⅱ」の取り組み—」『流通科学大学 高等教育推進センター紀要』No.2 (2017) 49-60.
- 2) 西川真理子、橋本信子、山下香、石黒太、藤田里実：『アカデミック・ライティングの基礎』(晃洋書房 2017)

- 3) 現代書林 Facebook ページ <https://www.facebook.com/gendaishorin/posts/1463564830405515> および 同社公式 Twitter <https://twitter.com/gendaishorin/status/935082600955129858?s=17> のいずれも 2017 年 11 月 27 日投稿による。(2017 年 12 月 15 日最終確認)
- 4) 図書館総合展公式サイトによる発表。 <https://www.libraryfair.jp/> (2017 年 12 月 15 日最終確認)
- 5) 第 1 回目は住野よる『君の膵臓を食いたい』(双葉文庫、2017)を、第 3 回目はビブリオバトルの優勝本である蒼月海里『幻想古書店で珈琲を』(ハルキ文庫、2017)を取り上げた。第 2 回目は課題図書を決めるために各参加者が 2~3 冊の推薦本を紹介した。学生の参加者は第 1 回が 3 名 (2 年生 2 名、1 年生 1 名)、第 2 回が 6 名 (3 回生 1 名、2 回生 4 名、1 回生 1 名)、第 3 回は 5 名 (3 回生 1 名、2 回生 3 名、1 回生 1 名)である。

参考文献

- 逸見俊郎：「正課外教育のもつ教育力」『大学時報』64, No. 364 (2015) 56-63.
- 黒木宏一ほか：「地域課題の解決への大学の主体的な関与：稚内ノシャップ寒流水族館多言語化 PJT を事例として」『稚内北星学園大学紀要』No. 17 (2017) 147-170.
- 新正裕尚ほか：「サイエンスカフェ・サイエンスツアーを組み合わせた社会科学系学部生への正課外自然科学教育実践」『科学技術コミュニケーション』No. 21 (2017) 79-87.
- 田中久美子、平尾元彦：「東京 PBL 合宿おもてなしプログラム 地元企業と連携した課題解決型学習の実践」『大学教育』No. 12 (2015) 38-44.
- 長谷川誠：「正課外の学生プロジェクトにおける複数年の活動を通じた学生教育効果」『応用物理教育』41, No. 1 (2017) 17-22.
- 村田晋也・小林直人：「正課教育、準正課教育、正課外教育 「愛大学生コンピテンシー」の育成のために」『大学時報』64, No. 364 (2015) 42-47.
- 山本珠美：「香川大学教育学部生によるラジオ番組制作：文部科学省現代 GP 「実践的総合キャリア教育の推進」の取組として」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』No. 13 (2015) 53-72.
- 山本珠美・藤本佳奈：「香川大学生によるラジオ番組制作 (II) 正課・正課外教育における FM 高松コミュニティ放送との連携」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』No. 19 (2014) 63-82. 新正裕尚ほか：「サイエンスカフェ・サイエンスツアーを組み合わせた社会科学系学部生への正課外自然科学教育実践」『科学技術コミュニケーション』第 21 号 (2017)

付記：本稿は、橋本・桑原両名で構想、議論を重ねた上で、以下のように執筆を分担した。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ章 1、Ⅳ章：橋本、Ⅲ章 2：桑原。

謝辞：本稿は、2017 年度流通科学大学教育実践推進費（課題名：「学生・図書館・地域書店業界の協働による読書推進活動の展開」（代表：橋本、共同研究者：桑原）の助成を受けた教育活動の成果報告の一部である。